

# 「民族の政治」の再編の可能性

## 発言者

山本 博之(司会) …… 京都大学地域研究統合情報センター

伊賀 司 …… 神戸大学大学院

西尾 寛治 …… 防衛大学校

舛谷 鋭 …… 立教大学

中村 正志 …… アジア経済研究所

鳥居 高 …… 明治大学

鈴木 絢女 …… 日本学術振興会特別研究員・  
政策研究大学院大学

塩崎 悠輝 …… 同志社大学大学院・  
在マレーシア日本大使館

金子 芳樹 …… 獨協大学

川端 隆史 …… 外務省

岡本 義輝 …… 宇都宮大学大学院

坪井 祐司 …… 学習院大学非常勤講師

山本 総合討論をはじめるとあって、これまでの議論で積み残しになっていたことや主な論点を確認しておきたいと思います。

1つ目は、先ほどのセッションで出された都市部でBNが負けたことをどう考えるかという問題があります。鳥居さんからおおよそのレスポンスがありました。これについてこの場でもう少し議論できることがあればしたいと思います。

2つ目は、今回の選挙結果の原因をどう考えるかということです。これまでの議論はこうまとめられるでしょうか。1990年代に入ってマレーシアが民族融和の方向に向かう中で、既存の民族別政党はサービスを提供するという役割が相対的に低下してきた。それと同時に、マレー人がマレー人らしさをどう考えるかという問題があって、イスラム教にマレー人らしさが求められることになったのではないかと。その際にマレー人は穏健なイスラム教を想定したけれど、非ムスリムからはイスラム化が進められたと見えるため、非マレー人の印象を悪くして、非マレー人のBN離れ、あるいはUMNO離れをもたらしたのではないかと。

3つ目は、「民族の政治」は終わったのかというこのフォーラムのテーマと関連して、マレーシア政治の行方に関することです。マレーシア政治の今後ありうるシナリオについて、いくつかの可能性が挙げられました。ひとつは、一方の極端な考え方でし

ようが、有権者のBN離れは一時的なものに過ぎなくて、何らかの形で華人政党とインド人政党がBNのなかに作られる、あるいはアブドゥッラー首相が辞任したらBNへの支持が戻るなど、具体的な形はいろいろあるとしても、いずれにしてもこれまでのBN体制がうまく機能するような方向でBNが修復されるという見方です。もう1つ、それに近い考えとして、BNは機能不全だけれど、野党連合がこれにとってかわって、マレー人を優位とする民族間関係とはやや違った形をとりながらも何らかの形で民族別の代表制を維持したまま連立政権を担うという見方です。この2つはいずれも、今ある「民族の政治」の枠組が基本的に残るという見方です。これと反対の極にあるのが、これはあくまで可能性の話ですが、マレーシアの人たちにとって、文化的・象徴的な意味としての民族は意味を持ち続けても、政治経済面ではすでに民族の枠組は重要でなくなっている、つまりマレーシア国民が形成されていて、極端に言えば民族ごとの政党には意味がなくなっているという見方です。その場合に既存の政党が単一の多民族政党に収斂していくかどうかはわかりませんが、そういう方向に進む可能性を含んで、マレーシアではこれまでの民族のあり方が大きく変わっていくという見方です。この2つの両極の見方の間にいくつか選択肢があり、現実になる可能性は両極端の可能性よりも高そうだと言えるかと思っています。可能性としてはいろいろ考

えられるのでしょうか、民族でないにしてもなお個人と国家の間に中間的な代表が必要とされるということであれば、そのひとつの可能性が、これまであまり使われてこなかった州の枠組なのかもしれないという仮説もでてきたように思います。

私からはこの3つを挙げておきます。他に議論すべきことを挙げていただいてもいいのですが、こういったことを中心に議論できればと思います。

### 州議会以下の地方選挙

**伊賀** 民族を超える枠組としての州の枠組という議論に関して補足します。いま野党側が求めていることは州議会以下のレベルの選挙です。野党やNGOの人たちがなぜそれを考えているかという、例えばどぶさらいのような日常生活のレベルで野党間の共同作業を積み上げていって、下からの民主主義とでもいいですか、下から積み上げていって最終的に上まで行こうということを言っている人たちがいます。そういう意味で言うと、今後野党が州政権をとった州でどれだけ身近なレベルで野党間の協力を進めていけるかは、州議会以下のレベルの選挙と絡んで非常に重要な点だと思います。

### 各民族のサブカテゴリー

**西尾** 「民族の政治」は終わったかということに関連して質問します。マレー人、華人、インド人というのがマレーシアにおける大きな民族の枠組みであること、またそのような民族の枠組が政党との結びつきのチャンネルとしてあるのはわかります。しかし、その中に包摂されているサブカテゴリーの影響が気になります。例えばマレー人というカテゴリーに含まれるブギスとかジャワなどは、政党の再編とかUMNOの派閥抗争などの際には全く関係がない、そのようなサブカテゴリーの影響は考える必要はないということでもよろしいでしょうか。このことは枠組としての州という話と関連してくると思うのですが。  
**塩崎** UMNOの話でいえば、州は派閥に類するものだと思います。州のUMNO連絡委員長は候補者指名にあたって権限が大きいし、党役員選挙でも州の代議員は州の連絡委員長の言うことをよく聞きます。ブギスとかジャワとかのカテゴリーはUMNOではあ

まり大きな要素ではないです。スランゴールの州首相のKhir Toyoは側近をジャワ人で固めているなどと言われているので、まったくないわけではないですが。

**舛谷** 華人の場合のサブカテゴリーとしては民系という5つのグループがあると言われています。シンガポールはリー・クアンユーの決断で方言を潰して英語と標準中国語にして、このとき言語面ではサブカテゴリーが完全に消えています。マレーシアの場合はそうではなくて、家庭内言語として方言を使っている、いろいろな意味でサブカテゴリーが生きています。ある華人系の文化サークルは、全マラヤを包括していると言っていますが、設立当初は潮州系だけを対象としていました。それがだんだん全国レベルに活動を広げていく中で、福建系とか広東系の人々も入っていき、今はオール・マレーシアン・チャイニーズのような形に見えています。投票行動や政党支持を見ていると、特にDAPが怪しいと思っているのですが、最初は特定のサブカテゴリーに偏って組織が作られて、それがオーソライズされていく中で他のサブカテゴリーで肉付けされていって、今ではサブカテゴリー横断的に見えているというところがあるのではないかと思います。

**山本** でも結局は華人というまとまりにしか向かわないということですか。サブカテゴリーが集まって拡大していく過程で中国系じゃない形でグループになることはないんですか。やっぱり華人は華人ということですか。

**舛谷** 華人の中が割れるかという話ですね。例えばMCAとDAPが何で割れるかというメカニズムのひとつとして、サブカテゴリーが意味を持つかという話です。

**山本** いや、今のお話は華人グループもはじめは特定のグループだけから始まっているものがあるという話ですね。最初のグループが大きくなっていくと、結局華人になってしまうという話なのか、華人という枠に収斂しない方向性はあるのかなと思ったんです。

**舛谷** さきほど金子さんと、今マレーシア国内でアクティブなイスラムの華人はどんな人かという話をしていました。MCAの婦人部に永楽多スという人がいて、彼女はMCAの婦人部に入るにあたっていろいろ

ろなことがありましたけれど、もともと台湾のウイグル人です。マレーシア人の夫が台湾に留学していて、マレーシアに来た当初は「私は台湾人です」といっていたけれど、だんだんマレーシア度を高めていって、自分はイスラムであると強調してきました。今はコーランなどを読みやすい華語に翻訳して華人社会への普及活動をしています。もう1人、アカデミズムの中で活躍しているムスリムの華人は、6・4天安門事件のときに中国から亡命してきた回族で、妻がマレーシア華人のようです。その人は自分のイスラムという特性を活かして、文明間の対話などのシンポジウムなどにいくと民族横断的なところに登場しているので、民族の枠を超えて活動していると言えるかもしれません。私の知っている中ではこの2人が目立ちます。どちらももともとマレーシア華人でない人たちがやっていることが特徴ではないかと思います。

### 「民族の政治」は終わっていない

**中村** 「民族の政治」は終わったのかという問いに私が率直に答えるとすると、すごくつまらない意見ですが、「民族の政治」が終わったと言い切るためには、民族がもう社会的な利益ではない、要するに人々が何かを民族的な利害だと考えなくなるというのが究極のポイントだと思います。それだと究極すぎて、そんなことはあり得ないとすると、やっぱり新経済政策かなと思います。新経済政策をやっている以上は、確実に政治的な利益であるわけです。一方で、仮に中国系やインド系の人たちが新経済政策をしてもいいとみんな納得をすれば「民族の政治」は終わったと言えると思いますが、これまで延々やり続けてきてそうはなっていません。逆にマレー人が新経済政策をやめてもいいと言えば「民族の政治」が終わるんだと思うんですが、新経済政策がなくなるまでは「民族の政治」は終わらないんじゃないかという気がします。この後どうなるかはわかりませんが。

**金子** 僕もほとんど中村さんの意見に賛成です。今回の選挙の結果は、インド系と華人のコミュニティの不満がけっこうな勢いで爆発した結果じゃないかという感じがしています。NEPに関する不満は、イ

ンド系や華人の中で脈々と続いているものですが、なかなか発する場所や方法がありませんでした。特にインド系はサイレントマイノリティで、コミュニティとしては訴えてこなかったんですね。しかも華人と違ってコミュニティがなかなか護ってくれないという中で、成り上がっていく人は成り上がって行くけれども、下層の人々は開発から取り残されて貧困層として社会の底辺によどんでしまった。これはけっこう長い期間積み重ねられてきたわけですが、なぜか爆発する発火点がなかった。でも去年の後半に発火点を迎えて、それを機会に吐露されるようになり、その延長線上に選挙があったと考えられると思います。華人の方はなぜかという説明は直接できないですが、蓄積したものが何かチャンスがあれば出てくるという形で維持されてきたところがあると思います。今回の選挙は、その部分に関しては「民族の政治」が活発に動いた事例として見る事ができるのではないかという気がしています。

**鳥居** 基本ラインは2人に賛成ですが、でもなぜこのタイミングかという議論をしなければならないでしょう。昨日からの話でだんだん像を結び始めたのは、インド人コミュニティに関しては長年の不満の蓄積があって、それからHindrafに対するBNの対応のまずさがあったということで説明がつくけれど、華人についてはどうでしょうか。1971年からずっと新経済政策をやってきているわけです。7%以上の高度成長をしているときには不満があっても吸収できていました。最近の5~6%というのもそんなに悪い数字ではありません。1987年にあれだけ緊張が高まったのは1985年と1986年のリセッションがあったからで、そう考えると、基本ラインに不満があったというのはよくわかるんですが、なぜこの時点なのかを分析する必要があります。ずっとマレーシアの現場を離れていたのでよくわかりませんが、インド人社会がある意味で独立50周年を狙っていて、独立して50年たったけれども我々のことを何も振り返ってくれない、そこでわっと不満が出た、ということでインド人社会に関して説明できるかもしれないけれど、華人社会がどう説明できるのかが見えてこないんです。華人はNEPが問題だとずっと言っているけれど、NEPをそんなに強化したということはない

いのではないかと思います。UMNOがNEPを強化したいと思っているということはあるかもしれないけれど、そうだとすると、なぜこの時期なのかという素朴な疑問が出てきます。

### 首相のリーダーシップ

**西尾** 金子さんは1969年の選挙と対比して首相のリーダーシップというようなことを指摘されていますけれど、それはかなり影響したと思いますか。民族間の関係が融和的な方向に進むとかえって問題が起こってしまうというか。

**金子** そういう不満が出やすくなった、不満を言ってもいいかなという環境を与えたという意味では、共通点があるんじゃないかという気がします。マハティールの時には不満を言いたくてもなかなか言えないという重石があったんじゃないかと思います。

**西尾** 民族的な枠組でがちっと締め付けていた方が安定するということですか。

**金子** それが究極的な解決策になるかどうかは別として、このところの変化に関してはそのように見られると思います。

### インド人社会の不満

**塩崎** インド人の不満については、NEPへの批判もあるとは思いますが、私がHindrafを初めて見たのは2005年12月のことです。ムスリムに改宗したとされるインド人がいて、家族は改宗のことを知らなかったんですが、亡くなってムスリムとして埋葬されたらMICやインド人社会がやたらに反発して、そのうちヒンドゥーの40団体がHindrafなるものを結成したというのに出くわしました。彼らに関係するNGOが教育活動を続けて力をためていて、一方で福祉活動をしていた弁護士が合流して拡大していき、小規模の集会を開きつつネットワークを広げていきました。2006年にインド人中心のキリスト教教会がムスリム2000人くらいに取り囲まれたときが民族間の緊張が最も高まって一触即発だったときだと思います。インド人がSamy Velluたちから離れたのはヒンドゥー寺院破壊事件が大きかったと言われていますが、イスラーム化の表れとしての埋葬や離婚などの問題があったのと、ヒンドゥー教がないがしろにされてい

るという宗教問題があったのだと思います。

### 華人社会の不満は何か

**金子** 華人の動きに関する話の追加ですが、PKRの中で華人の候補者数が増えていて、そこで相当当選しています。ここが今までの選挙からの大きな変化です。これまで華人の票は選挙ごとにDAPとMCAの間を交互に流れているようなところがあって、ちょっとMCAにお仕置きしてDAPに入れて、やりすぎたかなと思うとMCAに戻るといった行ったり来たりをやってきました。そういう意味では今回DAP側に行く順番ではあったと思うんですが、それだけではなくて、PKRであれだけ華人の候補が立ってそれが票を稼いでいます。昨日のセッションでも話題に上りましたが、PKRを支えている1つがNGOで、華人ベースのNGOや華人が活発に活動しているNGOがたくさんあります。そこが組み込まれてPKRの一部を形成しているのは新しい状況だと思います。もちろん、華人の動きはいくつかの要素を総合的に考えないと説明できないとは思いますが、ひとつは都市の中間層で、MCAには任せられないという層がNGOで活発に活動しているという事実です。そして、1999年の選挙でも同じ動きがありましたが、今回の選挙ではより鮮明な形で、華人とインド人が主体のNGOがPKRと結束を強めてひとつの勢力として結集したところが新しい動きといえると思います。

**鳥居** そうすると華人社会の不満は何になるんですか。これまで言語や高等教育で華人は機会を手に入れてきました。1980年代の華人の一番大きな不満は高等教育でしたが、統計を取ると今は国立大学の在學生と私立大学の在學生がほぼ同じで、もう私立大学が凌駕するほどになっています。その次の不満は規制緩和で、これもライセンス制はあるけれどもかなり自由になりました。ペナンを中心とした華人系の企業家は中国とのビジネスチャンスをつかんでいます。そう考えると、華人社会の不満が何なのかが見えてこないんです。華人系のNGOがどういうところを目指したかが見えてくると華人社会の不満が見えてくるのかもしれないと思います。

**舛谷** 『JAMS News』の最新号で、華人の団体やNGOを含むシンポジウムの報告を篠崎さんが書いて

います。ああいうシンポジウムは2、3ヵ月に1回開かれていて、MCA、Gerakan、DAP、PKRの人たちも一緒に参加していたと思いますが、非常に幅広い人たちが結集して華語で議論しています。篠崎さんはそれに参加して、マレーシアが華人に何をしてくれるのかではなく華人社会が華人にとって何をするのかという話なんだと分析しています。私はどっぷり華人社会に浸かっているのだからそれを不思議だと思ったことはなかったんですが、そういう見方もあるのかと思って、そう考えると華人社会の中で世代交代があるのかなと考えています。1987年の国内治安法発動を知っている1960年代生まれの人たちは1969年の暴動を知りません。今40代くらいの方は、1987年まで民族融和でやっていけると思っていて、でもそれが幻想で、1987年の緊張が起ってしまったわけです。それをきっかけに海外に行ってしまうとかいろいろな人が出たんですが、そのあたりを分水嶺にして、華人社会は従来のオールドカマーたちとイメージが変わってきました。例えばDAPは華語紙で必ず「反対党」と訳されています。最近では行動党と表記されることもあります。どの新聞でも「反対党」と表記されることが多かった。つまり「何でも反対」というイメージがあって、だから、今回の選挙結果は別として、DAPに政権を任せるというのが選択肢として実際にどれくらいありうるのかこれまでずっとわかりませんでした。今回もう1つの選択肢としてPKRが出てきました。アリランのような民族融和の運動に参加した人たちがいま40代前後になっていて、その人たちが意思決定する段階になっているということだろうと思います。今の30代や20代の人たちにとっても、50代や60代の人言うことよりも40代の人たちが言う「市民社会」などのほうが新鮮に映るだろうと思います。

もう1つ、鳥居さんが以前と比べて華人の権利は維持されていると言いましたが、華人自身はそう感じていません。例えばクォータはメリットシステムに名前を変えたけれど、結局同じだと華人は言っています。それから、華語紙に教育大臣のヒシャムディンが頻繁に登場していて、彼はナジブの次の首相候補ではないかと華人社会で言われたりしていますが、それが強いマレー・ナショナリズムを露わにす

るので華人社会はどうしたらいいのかと恐れています。主流メディアでも、大きな問題にならない程度にですが、深く読めばそういうことを書いています。

だから華人社会に全く不満がないわけではありません。

**伊賀** 私も、教育の面で不満が解消されているというのはたぶん違うと思います。ヒシャムディンが出てくるのは教育大臣だからです。クォータの話は高等教育の話です。問題になっていたのは小学校で理科と数学の教授言語が英語化された問題やダマンサラの小学校の廃校問題で、初等教育に限定すれば、華人社会には非常に不満がたまっていました。それを主管する大臣がヒシャムディンだからこそヒシャムディンが華字紙に頻繁に出てくるわけで、高等教育の方はよくなってきたかもしれないけれど、初等教育に関しては不満がたまっているというのが私の印象です。

**金子** 今のお二人の話を聞きながら、華人の不満とは何なのかを考えていました。3つぐらいにまとめてみます。1つめは、昨日の話に出たサービス、要するにコミュニティの中で足りないサービスをどうやって提供するかというところでMCAがそういう機能を発揮できなくなっているという不満です。もしくは華人コミュニティのなかで競争的にやられているから必ずしもMCAが相対的に優位を保てなくなってきました。ただし、そういう不満はNGOがまとめて吸収しているところがあります。NGOはサービスの提供をしていますが、もうひとつブミプトラ政策への批判もします。ブミプトラ政策に対して、正面からそれを否定して変えろと誰が言えるかを考えたとき、MCAには言えません。DAPは言えるかもしれないけれど、一般の華人にしてみればDAPに入って旗を振りながらでもブミプトラ政策に反対するかというと、そこまでの思いにはなかなか至らないでしょう。そのあたりをNGOはかなり吸収していて、サービスもやりながらアドボカシーもできています。

2つめは政治体制への不満で、市民社会という部分に関わってきます。マレーシアの場合、サバ・サラワクは違うかもしれませんが、民族によって市民社会の領域の規模とそれを認識する度合いが違って、グローバルスタンダード化した市民社会意識を最も強く感じて受け止めているのが華人社会では

ないかと思います。今のマレーシアでは政府がさまざまな社会統制手段を使って市民的自由を強制的に押さえ込んでいるという点が華人社会では問題になります。ブミプトラ政策とは別に、今の権威主義的な政治体制が許せないという市民感情が最も出やすいのが華人社会であり、その不満を同時に吸収してくれるのがNGOで、それに対して市民がさらにシンパシーを持つという構造ができていないのではないのでしょうか。

3つめは先のお二人が述べられた教育に対する不満で、政策として具体的にどこまでできていて、それを華人がどう感じているかという問題があると思います。全体でこのように3つくらいにまとめられるんじゃないかと思います。

### ブミプトラ政策の「重さ」から州自治へ

**鈴木** この総合討論の最初に山本さんが提起した問題は、人々がどういう単位で利益を表明するのかということと、利益表明をする際にどういうチャネルを使うかということだったと思います。そういうチャネルのあり方や利益の単位がどう変わっていくのか、それともそのままなのかを問題としたのだと私は捉えました。それらが変わるかわらないかは、それぞれの人にとってどういう枠組が自分の利益を一番表明しやすいか、どういうチャネルが一番使いやすいかによると思います。先ほど中村さんが「NEPがある限り……」と言いましたが、私もその通りだと思います。私はNEP以上に、憲法にマレー人の特権という規定がある限り、つまり、マレー人というカテゴリーが持つ特別の地位が強制力をもって実施される可能性がある限り、民族という単位での利益表明は続くと思います。153条に定められているブミプトラの特別な権利は、金子さんのお話にもありましたが、憲法10条4項で争点化が禁止されています。政策に関しては問題としてもいいとされていますが、憲法規定そのものを問題とすることを禁止する立法を行う権限を議会に与えたのが憲法10条4項です。それにしたがって煽動法の3条1項(f)が成立していて、いわゆるセンシティブ・イシューを問題とすることを禁止しています。また、州議会と上下両院の議員の免責特権はこの問題に適応されな

いことも憲法によって定められています。つまり、国会で議員がブミプトラの特権の規定はおかしいと問題提起できないわけです。以上に鑑みれば、ブミプトラの特別の地位に関する憲法規定をなくそうとするのは、たぶん法制度的に無理です。そのため、ブミプトラの特権はずっと残り続けるのではないかと思います。ひょっとすると別なやり方があるのかもしれないかもしれませんが、私はそういう理解をしています。この規定がなくならないことを前提とすると、人々にとってブミプトラの特別な権利が脅威として感じられなくなるためには、死文化するしかないと思います。書いてあるけれど書いてあるだけだと思えないということです。マレーシアは憲法を非常に重視する国なので、憲法規定の死文化は起こりにくいと思いますが、人々がその規定に意味がないと思うくらい全く別の対立軸が出てきたときに、もはや民族という単位が利益表明の単位として意味がないという認識が変わっていくんだろうと思います。たとえば政府がごりごりの権威主義になって、政府対市民社会の図式がはっきり出てきたら、ある意味で民族の政治が終わるのかもしれませんが。とはいえ、ブミプトラの特別な権利という規定がある限り、そして民族以外の別の対立や亀裂がととも重要だという強烈な印象が持たれない限り、やはり人々は民族の単位で利益表明するものだと思います。私は考えます。

**山本** 鈴木さんの言っていることと基本的に同意見ですが、あえて違う側面からの話を出しておきます。半島部のことだけ見ている限りはそう思うかもしれませんが、サバでは華人なのかブミプトラなのかかわからない人がかなりたくさんいます。名前も顔つきも生活習慣も華人に見えるけれどブミプトラの地位を持っている人がたくさんいます。そういう状況がしだいに増えていけば、現実には「ブミプトラ」というのが非華人・非インド人の「原住民」ではなく「国民」を指す状況が生まれるかもしれません。そうなればブミプトラの権利すなわち国民の権利ですから、ブミプトラ優先政策が維持されてもそれによって国民に亀裂や不満が生じないことになります。そうなれば国民はみんなブミプトラ政策を積極的に認めるようになるかもしれません。いまのところ可能性だ

けの話ですが、ブミプトラ優先にそういうシナリオもないわけではないと思います。

**鈴木** それは通婚するとかいうことですか。

**山本** 通婚もその手段の1つでしょうが、ほかにも抜け道は探せばいろいろあるだろうと思います。

**参加者** 今の仮定はどちらかというとな消極的な仮定でしたが、山本さんの仮定が現実に進んだとして、サバ・サラワクと規定は違うとしても州がある程度自立的な活動をして、マレーシア国民が各州の枠によって民族と違う枠で進んだとして、そのときに山本説で3つの民族と2つの州という制度の中のサバとサラワクという枠組はどう理解できるのでしょうか。つまり、現状で半島部では3つの民族の縦割りがあるけれど、仮定ですがそれがなくなったとき、マレーシア国民という全体を意識するというよりも州の単位で捉える可能性の方が考えやすいとすると、半島部の州も連邦政府に対してバーゲニングパワーを持ち始めたときに、全体の連邦のパワーバランスはどのようになると考えられますか。

**山本** 仮定の話なので答えにくいんですが、半島部の州が自治の権限を持つようになるかどうかというのは、憲法でどう規定するかという制度上の問題なので、連邦憲法の改正を伴う全国的な議論が必要になります。その過程でサバ・サラワクも含めてどのようなバランスになるかが議論されるものだと思います。その結果としてサバやサラワクの位置がどうなるかは当事者どうしの駆け引きの結果なのでまったく予測できませんが、いずれにしろ半島部の州が慣習法的に自然に自治州ようになっていくというような話ではないだろうと思います。

**西尾** Pre-Colonialの時代に成立していた港市国家では、政治的領域はマレー人が握っていて、経済的領域は非マレー系に開放されていました。経済的領域を外来者あるいは外来系の人々が握っていて、先住民であるマレー人が政治を握っているという構図は、独立後も、さほど大きく変わっていないという気がします。国民国家の時代になって、一方に偏っていた政治的・経済的利益を民族間で公正に分けあうことに対する要求は確実に高まっています。とはいえ、そうした要求には配分を微調整することで対応してきました。そのような配分の微調整という方法を、

おそらく今後もずっと続けていくんじゃないでしょうか。よきにせよあしきにせよ、これまでの歴史の過程で、それ以外の経験を積んでいないと思います。インターネットなどでさまざまな情報が得られる今日、その影響で市民の運動はある程度活性化するでしょう。しかし、それが政治や社会の急激な変革に直結するかは疑問です。

### 民族差別を伴わない「民族の政治」の可能性

**伊賀** 先ほど教育に触れたのでその話をしたいんですが、やはり華人が最も燃えるのは初等教育です。マレーシア政府はどちらかというとな教育を一元化しようとする方向に歩み寄っています。試験的に華人とマレー人を一緒にの学校で教育させるプロジェクトがありますが、華人は絶対に反対です。初等教育の認識という段階で民族別の考え方を超えられないのだから、民族別の考え方をなくすのはかなり難しいと感じています。

**中村** 私も、人々の意識というところではそれほど楽観できないんじゃないかと思っています。新聞を読んでいてまたこんなことが起こっているのかと嫌な気持ちになるんですが、最近、どこどこで暴動が起きるんじゃないかとNSTに数ヶ月に1回くらい記事が載っています。実際に人が死んだこともあります。何民族と何民族なのか詳しくはわからないですが、もともとはバイクで先に行かれたとかいう程度のただの喧嘩です。でも、仲間を連れてきちゃうわけです。カンポンメダンのときとそっくりですが、仲間を連れてくると何民族対何民族という話に展開してしまうんです。私の住んでる千葉県でもよくあるただの喧嘩で、千葉県民どうして喧嘩している分には問題ないんですが、それを民族どうしの対立だと解釈していく社会的コンテクストがまだ残っているのは認めざるを得ないんじゃないかと思っています。

**山本** その考え方には異論はないです。これに関連して先ほどのサバの話に補足しておきたいんですが、さまざまな経路の可能性を見るというのは可能性の幅を考えるとということであって、半島部もサバ社会のようになればいい、それが理想だというようなことを思っていることはまったくありません。私はサバ社会をととても気に入っていますし、研究対象の積

極的な可能性を見るのが研究の意義だと思っ  
ていますが、だから私がサバのことは大好きで何でも丸呑  
みなんだろうと誤解されることがあるのでそれは違  
うとはっきりと言っておきます。半島部には半島部  
のシステムがあって、それはそれで問題がないわけ  
ではないけれど、かなりよく練り上げられているシ  
ステムだと思っています。世界のいろいろな国や社  
会で半島部の経験がうまく利用できて、安定と成長  
をもたらすシステムとして、もっともっと積極的  
に世界に打ち出してよいシステムだと思っています。

**川端** 「民族の政治」は終わったのかというお題を  
いただいて、それを考えてきました。先ほど鈴木さ  
んから憲法規定の話があり、中村さんからブミプ  
トラ政策の話がありました。私も、仮に今後二大連  
合政党制になっていくのであれば、ブミプトラ政策  
の是非をめぐることになるのではないかと言いま  
した。その一方で金子さんや伊賀さんから違う軸の  
話が出されています。民族の政治とは違う価値が  
出てきて、民族の政治から抜け落ちたところを拾  
って調整するようなものが出てきたのかと思いま  
す。PKRがなぜあのような勝ち方をしたのかはも  
っと考えなければなりません。そのときには選挙  
結果の現象面だけでなくNGOのからみなども  
見るべきだと思います。もともとNGOというの  
は社会的な問題を政府や政党によらずに解決する  
もので、特に華人社会で発達してきたわけですが  
、それをベースとするPKRが選挙で勝ったこと  
は、民族の問題は重要で今後もおそらく残り続  
けるけれど、そこから漏れているところを調整  
するようなもうひとつの軸が今回の選挙で出て  
きたということかと思っています。もう1つの  
軸というのが、価値観やイデオロギーとして違  
うものが芽生えてきたのかどうかはまだ漠然と  
しかイメージできていませんが。

**山本** マレーシアの政治制度はとても特徴的で、  
民族というのをマレーシア社会の文脈にあわせて  
作り出して、民族ごとに自治のようなことを行っ  
ています。いわば複数のナショナリズムが平和的  
に同居する国作りを積極的に認めているわけですが  
、この民族自治あるいは民族連邦が特定の民族  
を優遇するブミプトラ政策と抜きがたく結びつ  
いているため、他地域の研究者から見るとマレー  
シアの民族の政治は

権威主義体制で民族差別体制だと言われてしま  
うことになります。拳句の果てにはマレーシア研  
究者のなかにもマレーシアは独立の過程で1つの  
ネイションが作られなかったからよろしくないとい  
う人まで出る始末です。ところが、今回の総選挙  
の結果、近い将来に野党連合側が政権をとった  
ときに、おそらく「民族の政治」という大きな  
枠組はなくなるだろうけれど、マレー人の優位  
の度合いがかなり相対化されるような可能性が  
見えてきました。もっと強く言うならば、野党  
側が政権をとれば、民族自治や民族連邦をブ  
ミプトラ政策抜きで進める可能性が見えてきた  
と言えるかもしれません。あるいは、BNが何  
らかの改革をして政権党として生き残る場合  
でも、ブミプトラ政策の見直しを含めて、マ  
レー人の優位が相対化される可能性が見えて  
きたとも言えるかもしれません。このように、  
これまで「民族の政治」が特定民族の優遇と  
セットで語られていたのに対し、今回の選挙  
を契機に、特定民族の優遇を抜きにした「民  
族の政治」に近づきそうだということは言え  
るのではないかと思います。そうだとしたら、  
マレーシア研究者は、マレーシア社会がこれ  
まで多民族状況でいかにして民族共生のため  
の工夫を重ねてきたかという経験をもっとも  
っと自信を持って世の中に発信することができ  
るようになるかもしれないという希望が見え  
てきた気がします。このフォーラムの問いかけ  
である「『民族の政治』は終わったのか」に  
私なりに答えるとすると、おそらく「民族の  
政治」は終わったわけではなく、終わるのは  
「民族の政治」と聞いたらネガティブな評  
価をしていけば済んでいた時代なんだろう  
と思います。民族が積極的な役割を担う社  
会のあり方を考える上で、マレーシアの  
経験は今後ますます重要になっていくこと  
だろうと思います。

**山本** 予定の終了時刻が近づいてきましたが、  
最後に、特にこれまであまりご発言がな  
かった方で、こんな考え方もあるという  
ことがありましたらお聞かせください。

**岡本** 今回の選挙の政治的な意味合いにつ  
いてはよくわかりませんが、ビジョン2020  
に向かって1人当たり1万ドル以上のGDP  
にしようとするなかで、マ



レーシア社会にひずみができているんじゃないか、ちょうど日本の格差社会のようなものができているんじゃないかと思います。以前はみんな貧しい農村社会でよかったけれど、最近では金持ちが増えてきて格差が拡大しているなかで、人々の気持ちが変わってきているのではないかという感じがします。今回はいろいろな報告をお聞きしましたが、そのへんの経済的側面からの分析も必要ではないかと思いました。

**坪井** 今回の選挙では、地域によって違うとはいえ、全体として投票率が上がっていて、政治や選挙に対する高い関心があったのだらうと思います。このフォーラムでも何回か世代の問題が話題に上っていて、1969年の暴動などを経験していない世代という指摘もありましたし、メディアの話でも若い世代はいろいろなメディアに触れているという話もありました。今後、今回の選挙に表われた方向で変化が進むのか、あるいはそうならないのかにとっても興味があります。若い世代が今回の政治変化の原動力になったのか可能性が指摘されていましたが、世代が変わると若い世代もまた保守化してやり戻しがある可能性もあるかもしれません。そういう世代的な差異をもう少し考えてみてはどうかと思いました。

**山本** 個別の議論はまだこれから盛り上がっていく感じもありますし、まだ議論されていない論点も出させていただきましたが、今回のフォーラムはこれで終わりとさせていただいて、残された議論はこの後にいろいろな場所でそれぞれ展開していただければと思います。それでは、2日間にわたってフォーラムに参加してご議論いただき、どうもありがとうございました。これをもちまして、公開フォーラム「『民族の政治』は終わったのか——2008年マレーシア総選挙の現状報告と分析」を終わらせていただきます。みなさんどうもありがとうございました。